

悪化する山川

住職にあんなに言われたが、落合博満野球記念館に行ってみたい気持ちは何年も前からずーっとあって、交通の便や宿泊施設を調べたこともあった。何しろ、和歌山の太地までは遠くて、行くだけで一日が潰れてしまう。二泊三日は必要だ。ああ、どうしようと、あれこれ考えているうちにどんどん時間が経って、日本中移動が憚^{はばか}られる新型コロナ禍に陥ってしまったのだ。

落合博満記念館は火曜日が休館日だが、このコロナ禍でどうなっているかわからない。電話を掛けて確かめようと呼びますが、誰も出ない。時間をおいて何度も掛け直すが、やはり誰も出ない。

頭を巡らせて、太地の町役場の観光課なら何か情報があるだろうと思いい、電話してみた。落ち着いた声の中年男性らしき人が電話に出た。

「落合博満記念館に行きたいのですが、電話してもどなたも出られなくて、開館しているかどうか、そちらでわかりますか？」

「基本的に火曜日が休館日なんです。六月末から改修工事をしてまして、まだ、休館中です」

「六月からだ、もう改修工事が終わる頃でしょうか？」

「いや、こちらではわかりません」

「一〇月頃だったなら終わっていますかね？」

「いや、こちらではわかりません」

私がつくりきた。

どのくらい待てばいいのだろうか。

コロナもあるし、年内は休館なのだろうか。

でも、落合一家は、年末年始は太地で過ごすらしいから、それまでに改修工事を終えるかもしれない。落合在館のときは、入り口に「滞在中」の看板が掛けられ、落合自らお茶を淹いれてくれたり、野球の話をしたりして、写真撮影にも気軽に応じてくれるそうだ。二

〇二〇年初めの「中日スポーツ」にそんな記事が載っていた。

これは、ちょこちょこ電話するしかない。

私は、落合記念館のことをしばし忘れて、西武・山川穂高を毎日応援する。NHKの落合対山川対談以来、私はすっかり山川ファンである。落合のアドバイスを山川がどれだけ生かして三冠王に近づくかの軌跡を、この目で確かめたくて見ているうちに、山川のファンになったのだ。いやいや、西武ファンにもなっていた。

ところが、七月の山川は、ホームランは出ているが、打率が上がってこない。

ちなみに、七月三〇日のソフトバンク戦は、

一打席目、レフト線ヒット一打点。

二打席目、四球。

三打席目、四球。

四打席目、四球。

五打席目、三振。

七月三十一日、ソフトバンク戦。

一打席目、四球。

二打席目、一二号ホームラン。

三打席目、ライトフライ。

四打席目、三振。

四球をこれだけ選んでいるのに、打率がなかなか上がってこない。見れば、打席の構えが昨シーズンよりも高くなっている。この高くなった構えの影響なのか、投手の投げるストリートに差し込まれる。バットが遅れて出てくる。それほど速くもない球に詰まって、凡フライが多い。

安打が増えてくれば打率も一気に上がるのにと、歯ざしりしながら、山川ってこんなもんじゃない、こんなもんじゃないと思いつつながら、七月は終わってしまった。私は、山川に性急な落合効果を期待しすぎたのかもしれない。

住職の「山川はこれからが始まりです」の言葉に励まされるが、落合はここまでの山川のバッティングをどう見ているのか、訊いてみたい。

山川は八月に入っても成績が上がってこなかった。山川の今シーズンは死球が多い。インコースをどんどん攻められている。死球になっても、山川は絶対に痛そうな顔をしない。だが、八月九日、日ハム戦、死球ではなかったが、初回の打席でスイングした際に体勢

を崩して右足首を捻^{ひね}り途中交代した。

翌試合、山川が初めて欠場した。

次の日、代打で一打席のみ出場したが、打撃はバラバラだった。低めのボールには手が出ない。打っても三塁ゴロである。

山川のスイングには力みがあつて、バットが遠回りして出てくる。何か思い切つて変えようとする意欲も見えてこない。このどんだ底を、落合熱だけで越えようとしているかのようだ。山川の八月は最悪だった。

九月に入つても、山川の打撃は上向いてこない。打席に立つても、テレビで観ている私には打てるような気がしない。

思いつきりスタンスを開いて、体の反動を使って打とうとしている。落合のように、くると体を回転させるような打ち方ができないのだ。力が分散している。工夫がない。

右足首の捻挫が本当に治っていないのではと、心配になる。バットの芯に当たつても上に球が上がっていかず、打席のなかでも落ち着きがない。以前は、三振すると悔しい気持ち丸出しにしながらベンチに帰っていく姿もあったが、今の山川からは悔しさも消え失

せている。

ベンチに戻っても、テレビに映らない端っこに座っている。明るい表情が消えている。ベンチでは、マスクをして腕を組んで黙っている。こちらも、山川と同じようにテレビの前でマスクをして腕組みしている。

九月二五日、楽天戦欠場。山川の欠場を、落合はテレビで観ているだろうか。

昨年 of NHK 対談のときに、落合が「(今、バッティングを変えたら)とんでもないことになるぞ」と言っていたが、まさしく本当のことになってしまった。

一〇月に入ると、山川から笑顔がなくなった。西武を支えているという自負も気迫も消え失せ、テレビに映る姿は虚ろである。

自分で自分が何をやっているのかわからない様子に見えるときもある。

私はそれでも、山川が出場する試合の日は、今日こそ打つのではないかと、祈る気持ちでテレビの前に座る。

ところが、チャンスでダブルプレーになり、ランナーとして一塁に残っても代走を送られる始末だ。

これは、辻監督の配慮で、やはり、山川は右足首の捻挫が治っていないのだ。

走るのが大変なのだ。

ホームラン性の当たりも、フェンス手前でお辞儀して、フェンスを越えず外野手に捕られてしまう。打球に伸びがないのは、支える足の力が足りないから、右足が踏ん張れないのだ。明らかに右足を故障している。

山川からまったく笑い顔が消えた。

テレビ局も、山川を気遣ってかあまり映さなくなった。ああ、もう最悪の連続である。

私の落合への思い入れ、念が足りないのだろうか。住職が言うように落合博満記念館に行っていないことが影響しているのだろうか、半ば神頼み・験担ぎの心境になってきた。

ここで私も気分転換したい。

残る試合も少なくなってきたし、Go Toトラベルキャンペーンも始まったので、記念館も開いているだろうと、電話を掛けてみた。

やっぱり誰も出ない。

次の日も次の日も連絡してみたが、誰も出ない。太地の観光課に再度、電話をする。

今度は若い男性の声だ。

「昨日、落合記念館の前を通ったのですが、休館中の看板が出ていましたので、まだ、休館中ですね」

「いつ頃になればやるんですかね」

「ちょっと私にはわかりません。誰もいないのは確かです。申し訳ありません」

電話の向こうでは本当に申し訳なさそうな声を出している。観光課の人をこれ以上責めても仕方がない。

こうなったら、山川のためにも、落合博満記念館が休館していても、太地に行くのだ。もう私はいても立ってもいられない。

今、私ができるのは、落合記念館に行つて、山川へのイライラを吹っ飛ばすことだ。

正直言つて、開幕戦から山川を応援してきたが、気持ちのイライラだけでなく体もヘトヘトになっていた。終盤に向けてこの疲れを、落合記念館のある太地で癒やし、風景を目に焼き付けて、山川を応援し直すのだ。